HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.18

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 人間学から人間力の形成へ	松　本　和　彦 （学生部長・教育能力開発センター教授）
⇒ 苦し紛れにはじめた読書	竹　内　弘　名 （未来創造学部教授）
⇒ 本と図書館	北　川　真由美 （外国語学部英米語学科3年）
⇒ 僕とライブラリーセンター	銭　　春　軍 （大学院薬学研究科2年）
⇒ 私が見た図書館	楊　　静 （外国語学部英米語学科4年）
⇒ 薬学部図書館の一利用者として	山　折　　大 （薬学部助手）
⇒ 寄贈図書	

⇒ 目次

ISSN 1342 - 3827

HOKURIKU UNIVERSITY
LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
2nd-Half 2004

Bulletin NO.18

人間学から人間力の形成へ

学生部長・教育能力開発センター教授　　松　本　和　彦

ベルリンのツォー駅の近くに1844年ドイツで最初に開園した動物園がある。私はそこに３回訪れたことがある。私が観察されているようにも思えるのだが、長い時間観察していても飽きることのない動物がいる。オランウータンである。この動物の表情や仕草を見ていて深く考えさせられるのは、「人間とはいかなる存在なのか」、また「人間はいかにあるべきか」という根本的な問題である。動物を見るときには常に人間と比較するからだろう。

カントの最晩年の著作に『実用的見地における人間学』（1798年）がある。この人間学講義は、『自然地理学』（1802年）とともに大学の講義としては、カントが歴史上初めて行ったものである。私たちは自然科学や人文科学などいろいろな学問を研究するが、究極的にはこれらの学問はすべて人間学に収斂（れん）するように思われる。カントは、世界市民的な意味での哲学の領野を次のように位置づけている。

①私は何を知りうるか。
②私は何をなすべきか。
③私は何を望むことが許されるか。
④人間とは何か。

第１の問いには形而上学が、第２の問いには道徳学が、第３の問いには宗教が、第４の問いには人間学が答えるが、根本的にはこれらすべては人間学に包摂することができる。なぜならば、最初の３つの問いは最後の問いに関連するからである（『イエッシュ論理学』1800年）。

この知的営為の順番はカントの学問的軌跡に対応している。若きカントは、天文学、物理学などの自然科学を探究し、それを基盤として最初に認識論（理論哲学）を確立した。ついで、実践論（実践哲学）を論究したあと、芸術論をはさんで宗教論に至る。そして、これらの学問は最終的には人間学へと収束することになる。私たちは、「人間とは何か」という事実認識とともに、「人間はいかにあるべきか」という価値認識を基底としてあらゆる学問を探求しなければならない。そのためにも学生諸君にあっては、自然科学、人文・社会科学のあらゆる学問領域を教養（リベラル・アーツ）として幅広く学んでもらいたい。

ところで、カントは、人間が究極的に身に付けなければならないものは賢知であるとしている。この賢

知を「人間力」と言い換えてもいいだろう。賢知とは、理性を実践的に、法則にかなって完全に使用する境地を指す理念であるが、人間はこれを自分自身の力で形成しなければならない。私たちはどうすれば賢知に至ることができるのだろうか。カントは、そこに到達するまでの３つの格率を提示しているが、これらは私自身も絶えず反省させられる助言である。

①自分で考える。

②（他者と交流する場合には）その他者の立場を考える。

③常に自分自身に矛盾するところがないように考える。

私にとって興味深いのは、カントが年齢に応じて、賢知に至るまでの３つの段階を示していることである。「人間が自分の理性を十全に使いこなすようになる年齢は、熟練（任意の企てを達成するための技術的能力）の点からいうとだいたい20歳が目安であり、利口（他人を自分の企てのために利用する）という点では40歳、最後に賢知に達する年代はほぼ60歳と設定することができる」と、カントは言う。私たちは今、自分の人生を振り返ってみて、どの段階にいるのだろうか。賢知に達するのはカントも述べているように、「各自に要求するのは人間にとって、確かにいささか酷な話である」といえる。たとえこの段階に達したとしても、「せいぜいその前の２つの段階がすべて愚かの連続であったと達観するのが関の山である」のかもしれない。ここに至って私たちは、ようやく「自分は正真正銘善く生きるべきであったと今初めて自覚したとたんにそろそろ死なねばならないとは、残念なことだ」と悔いることになるのだろうか。

本学では人間学講義が開講されているが、学生諸君にあっては、この人間学講義をきっかけとして、真の人間力を形成する第一段階として、悔いることのない学生生活を送っていただきたい。

苦し紛れにはじめた読書

未来創造学部教授　　竹　内　弘　名

「人が味わう苦痛は喜びをはるかに凌駕（が）している。」

「人間の狂気の広さに比べれば、人間の正気は方丈ぐらいなものである。」

思い起こせば心の中を無常の風が吹きすさび生きることがこの上なく苦しく、ただ息をすることだけで心がうずく。地獄そのもの。受け入れがたい自分自身に苦しみ悶（もだ）え何もかもが虚（むな）しくすずろに寂しい思いを呼んだ日々。運命の河にもてあそばれおびただしい苦悩の水を呑み、不安と不信そして厭世観に恐れおののく。悶絶瀕（ひん）死の生きる屍（しかばね）。なぜにこうも自分自身を傷つけ人を傷つけなければ生きられないのか。なぜにこうも闇を生きねばならないのか。ありもしないものを求めに求めて煩悩の海原を彷徨（さまよ）う。理不尽な運命の歯車は狂うに狂う。何もかもが正反対の方向へと暴走してやまない。いったい私が何をしたと言うのか。どんな罪を犯したというのか。あがけばあがくほど運命の歯車は嘲笑（あざ）うかのようにきしみをあげて狂う。ひたひたと忍び寄る悪魔のいざない。どす黒き大きな闇が口を開け蜜の味で誘う。ああ、楽になりたい。何度思ったことだろうか。こうまでして生きる価値など何処にあろうや。

心の牢獄の淵からかろうじて這い上がれたのは、難しい理屈でも高尚な理念でもなかった。ただただわが子の先行きを案じ、老骨に鞭打ち生きる老いやつれ果てた父の後ろ姿であった。私は、「子に息をかけて育てているんだよ。」とぼそりと言った父の一言が忘れることができない。それだけが私を辛うじて踏みとどまらせた。悲しい思いだけはさせられない否、させない。残された唯一の命綱であった。

何処かに答えはないだろうか。

心を癒してくれるものはないだろうか。

心の牢獄から抜け出る道はないものか。

閉じこもり生活からやっとのおもいで外に出た時は、もうまぶしい太陽の季節になっていた。衝動的無差別的な書籍あさりが始まった。御茶ノ水から神田神保町界隈(わい)そして早稲田、新宿、池袋、板橋、阿佐ヶ谷界隈など悶々とした徘徊(はいかい)の古書店巡り。心の憂鬱(うつ)が滴り落ちていた。

いつしか30有余年経って我が娘曰く。お父さんの書棚は、「生きるとは、人生とは、孤独、忍耐、矛盾、善悪、哲学、歴史書ばっか」と言う。なんか重苦しいものばかりで暗いよ。「もっと元気のでるもの読まないと」と言う。心密かに、それができればどんなに癒(いや)されたかと、つぶやく。私とともに生きた分身たち。心の嗚咽(おえつ)を静かに聞き届けてくれた戦友たち。私の苦しみを知り尽くしているかのように、今も静かに語りかけてくる。

「朝に生まれ夕べに白骨」

「世に恐いものがあるとすれば、それは人間だ。」

「人間に恐いものがあるとすれば、それは自分だ。」

「人間の生きる相、亡びる相、争う相、泣く相、栄える相、血みどろな相・・・」

「魚は河に棲んでいるが河の大きな相は見えない。」

「悠久な大河の源と、果てとを見極めるには魚の眼ではいけない。」等々

苦し紛れに飛びつき始めた私の読書。語れる高尚なものなど何も持ち合わせていないのです。「人の世に生きる上は、心に波打つは人としてやむを得ない。」「心こそ心惑わす心なれ、心に心心許すことなかれ」と戒めるだけなのです。考え見つめてもやはり明日をも知れぬわが身なのです。刻々の思いにとらわれ過ぎないように。そして、不信の刃で我がこころを傷つけることなく、心の声魂のささやきをできるだけ多くの人から得て、我が心を養い我が知恵を誤りなく豊かにしたいものです。

心の牢獄をせめて心の箱庭に変え、鶯(うぐいす)の一声鳴かせられたらと小さな夢。露一滴ほどのものさえ到底持ち合わせていない未熟な旅人なのです。旅人は旅の供として心の書があれば幾ばくかの慰めにもなりましょう。「苦悩迷いは尽きることなし。」魂のうめきに耳を傾けながらまだまだ続く心の旅路。

わが北陸大学にも魂の囁き心のうめきの書が私を誘うかのように書棚に佇(たたず)んでいます。更なる出会いを求めてライブラリーセンター蔵書巡礼の旅に出かけたばかりです。

また、末筆で大変失礼とは存じますが、この短文を読んで頂きました方から次のようなお言葉を頂き視界が開けるような思いが致しました。

「よくととのえし、おのれこそ、おのれのよるべ」

有り難いことです。月明かりがおぼつかなき足元を照らし出すと共に、導いて頂けるのですから。感謝しなくてはなりません。

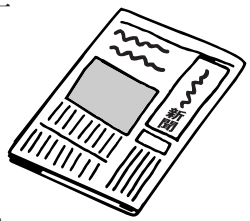
最後に、この身の上を感謝し静かに亡き父に合掌するものです。

本と図書館

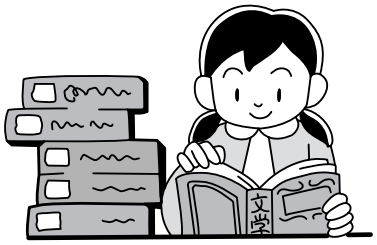
外国語学部英米語学科３年　　北　川　真由美

本を読むということには、利点がたくさんあります。まず、大昔の人や世界の遠く離れた人など決して出会うことの出来ないはずの人達の経験、知識を手にできること。次に、知識や情報などを短時間で知ることができること。あと、日本語にも強くなり、知識が増えることで話題は豊富になります。知識ならテレビやラジオでも手に入るかもしれないが、やはり流れてゆく映像や音を目で見る、もしくは耳で聞くだけでは時間とともに自分の中から消えていきかねません。本当に自分のものにするためには、活字を読み、読み返すことが必要となってくるのです。小さいときから私を形成してきたのは本でした。文字が読めるようになるまでは母が、読めるようになってからは自分でたくさんの本を読んできました。そんな私なので、これまでも図書館は利用してきましたが、大学の図書館の利用法はこれまでと少し変わりました。

高校までの授業では、基本的にどの教科にしても決められたことを覚えることが主体でした。だから図書館で借りるのは主に趣味の本のみでした。しかし、大学では、専門科目についてまた、別の科目についても調べるという作業がとても重要になりました。したがって、趣味以外の幅広い分野の本を読むようになったのです。



大学では、勉強するもしないも自分次第というところがあります。本当に勉強しようと思う時、その導き手になってくれるのが各種資料や文献。そして、それらが集まっている図書館は大切な場所です。レポートや卒論を書くための資料探し、知らない事を調べる時（新聞や辞書も豊富です。）、また、自分が興味のある分野の本を読む場合など、図書館は様々な利用の仕方があります。そして、何より私は、図書館の雰囲気そのものが好きです。静かな空気を求めて図書館に行く事もあります。面白そうな本を探したり気になる本に目をとめてしばらく読んだりもします。試験の前なども活用させてもらっています。利用者が大幅に増えるので、勉強場所の確保に多少手間取るのは事実ですが、まわりでみんなが真剣に試験勉強に励んでいる姿をみると、自分もやる気が駆り立てられます。こんな図書館を私は、これからも利用し続けたいと思います。利用法は人それぞれなので、みんなにも自分なりの方法で是非活用してほしいものです。



僕とライブラリーセンター

大学院薬学研究科２年　　**銭　　春　軍**

ライブラリーセンターに初めて来た光景が、ずっと僕の思い出にはっきり残っている。当時の僕は、日本に来たばかり、言葉はまだ通じません。ライブラリーセンターへ本を借りに行く途中、何かと心配でした。本の貸し出しの手続きができるのか？言葉が分かるのか？職員に答えられるのか？・・・どきどき、心配で胸がいっぱいでした。そう考えながら、いつの間にかライブラリーセンターに入った。目の前には、明るくて、静かな空間が現われた。本棚のそばに緑の盆栽が並んでいる。自然を味わえてとても良い。こんな雰囲気があるとは思わなかった。そして、笑顔満々の職員が挨拶をしてくれた。その瞬間、不安が消えてしまった。僕にだって、気楽に利用できるところじゃないか、不安、心配は要らないと思った。その日から、たびたびライブラリーセンターに足を運びました。

最初は簡単な日本語で書いた本を借りて来た。本を読みながら、日本語の勉強にもなった。文法、単語、言葉の言い方など少しずつ身に付いてきた。そして、周りの人の話すことが分かるようになった。自分の日本語が話せるようになった。これらの本を通して、日本の社会文化、風俗、礼儀、生活習慣などが全面的に理解できた。とくに日本人と外国人の違い、日本人の考え方の特徴などがいろいろ分かった。外国人としてどうやって早く日本になれるかという知識を学んだ。僕にとって、ライブラリーセンターは、日本語の勉強になるところ、且つ、日本を理解できるところである。

研究のために、色々な文献、論文をライブラリーセンターへ探しに来た。本棚の間に身を隠し、何千何万冊の製本文献から、やっと自分の欲しい論文を手に入れた時、何となく自慢したくなる心境となる。だが、どうしても見つけることができない場合もある。そんな時でも、特に心配することは要らない。自分が探している論文の検索をライブラリーセンターの職員に依頼することができるからである。いつも短時間に探してくれる。文献検索の相互利用書を書いて、ライブラリーセンターの職員に出すと、たった２、３日で論文が手に入る。今は、学校のインターネットの進歩によって、論文の検索の手続きも簡単になりました。研究室のパソコンから、マイカリンで相互利用の依頼書を出すことができる。ライブラリーセンターはネットワークを通して、簡単、便利、迅速をモットーにしており、応用範囲が広がった。僕にとって、ライブラリーセンターは研究になくてはならない存在である。

研究で体が疲れた時、頭がイライラする時、つまらない時、ライブラリーセンターに入り、図書の香りに囲まれて静かな空間で息をすると、頭を冷やしてくれ、心を癒(い)やしてくれる。何か自分の興味にあう本１冊を手に入れて読み始めると、本の世界に身を運び、美しいことに出逢え、面白いところに遊び、現実の悩みを忘れてしまう。本を閉じると、新しいパワーがみなぎり、新しい自分に変わる。周りで頑張っている人の姿を見ると、自分への刺激と激励になる。さあ！頑張らなくては。僕にとって、ライブリーセンターは気分転換によいところである。

今後、研究のために、読まなくてはならない本がたくさんある。修論を書くために、文献を調べることが沢山あるが、僕はいつも喜んでライブラリーセンターに行く。ライブラリーセンターは僕のライブラリーセンター、勉強も、楽しみも・・・。君は、どう・・・？

私が見た図書館

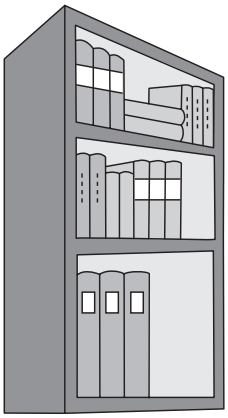
外国語学部英米語学科４年　　楊　　静

私は、三年次生の時から図書館でアルバイトをやり始めました。その後も図書館を毎日利用しています。私がいつも利用しているのは言語関係の分野です。図書館での生活は、一日三食と一緒、私の日常生活の一部分のような存在になりました。

最初は日本語の本ばかり読んでいた私にとって、図書館が家と同じ、勉強する場所になりました。仕事が多くなるにつれ、図書館においての時間も増え、図書館をいろんな面から利用できるようになりました。

新聞も雑誌も日本語のものだけではなく、外国語の新聞も沢山あるので、勉強するにはとても役にたちます。たとえ留学生は自分の国と離れていても、世界との距離もそんなに遠く感じません。また、本を検索する場合も、コンピュータで簡単に検索できて、使いやすいです。世界中の出来事も簡単に知ることが出来ます。

書庫に入ると、各分野の本が綺麗に本棚に並んでいます。本が好きなあなたであれば、どの本を借りたらいいのか迷ってしまう程です。この使いやすさと本の豊富さが図書館の大きな特長です。そして、この特長と機能こそが学生たちの精神や知識を育てているのです。



ここで働いている私は、目に入ったこうした実態の影響により、図書館に対する愛情が一層深くなったと実感しています。暇な時に先生たちとの雑談で「もともと本が好きな私にとって、図書館で働くのは昔からの夢でした」と、笑いながら自然に言い出していました。本を読むと知識の栄養をもらうことができるので、図書館で働く時、ある程度の栄養士になったんじゃないかとさえ思ってしまいます。心からの喜びを浴びている私は、いつも笑顔で仕事をこなし、この喜びを図書館に来られた皆さんと一緒に感じたいと願っております。

図書館にある本もこれからたくさん利用していきたいと思います。北陸大学の図書館は、このようにとても便利で使いやすく、本の種類も豊富だと思います。是非皆さんも読みに来てください。

薬学部図書館の一利用者として

薬学部助手　　山　折　　大

私が北陸大学薬学部図書館へ足繁く通う理由はいくつかある。それは、①科学誌を読んだりコピーしたりすること、②「実験医学」と「蛋白質・核酸・酵素」という月刊誌を読みに行くこと、③相互利用の文献を受け取りに行くことなどである。

文献の検索はPubMedから行うことができ、雑誌（*J. Biol. Chem.*、*Mol. Pharmacol.*、*J. Pharmacol. Exp. Ther.*、*Drug Metab. Dispos.*など）によっては欲しい論文がPDFファイルでとることができるので、わざわざ図書館へ行く必要がないものもある。しかしながら、半分以上の文献は、PDFファイルではとれないので、図書館に行くか、学外文献であれば相互利用で申請することになる。

当図書館は、決して大きいとはいえず、蔵書の数は限られている。しかし、研究を進めていく上で必要最低限の雑誌は揃っており、さほど不自由は感じない。ただ、敢えて言わせていただければ、オンラインジャーナルの数がもっと増えれば、図書館へ行ってコピーをしたり学外文献の申請をしたりする頻度が少なくて済むようになる。また、雑誌の数がこれ以上増えるのを抑えることができるので、書棚のスペースを増やす必要がなくなると思われる。

当図書館は、私が２年前に着任した頃から利用時間が大幅に拡大し、私にとっても、また勉強熱心な学部学生にとってもより利用しやすいものとなっている。さらに欲を言えば、24時間利用可能になればさらに便利になると思う。私が在籍していた大学院の図書室では、通常の貸し出しは午後５時で終了するが、雑誌の閲覧は24時間可能であった。書庫・閲覧室は学生証をカードリーダーに通すことにより入室することができ、心行くまで閲覧することができた。大学院生のとき、夜中から明け方にかけて研究室と図書室を何度も往復した記憶が思い起こされる。

上述したように、私は、必要な文献をとりに行く以外に、月に一度、「実験医学」と「蛋白質・核酸・酵素」を読みに行く。研究の最新の情報は、やはり英語で書かれたものからしか得ることができないが、日本語に翻訳されたものも以前に比べるとだいぶ早く出回るようになったので、何か新しい概念や技術が報告されていないかとこれらの雑誌を読みに行くことを毎回楽しみにしている。また、専門領域以外の分野で英語では、上手く解釈できない表現・言い回しなどを理解する助けにもなっている。

この先、インターネットなどパソコンを媒介にした情報化社会はますます発展し、図書館を取り巻く環境もめまぐるしく変化していくものと考えられるが、今後とも利用者が便利であると実感できるサービスを常に提供していっていただける、そんな図書館であって欲しいと願うものである。

寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

著　者	書　名	寄贈者
三浦　　泉	薬剤師と法	三浦　　泉（学長補佐）
大久保一徳	薬と社会と法	山本　健次（薬学部教授）
市川　　勘（王涵）	韓愈研究新論	王　　涵（教育能力開発センター教授）
鹿島　正裕	21世紀の世界と日本	叶　　秋男（教育能力開発センター教授）
佐野　新一・蒲　真理子	青年期からの健康運動科学　改訂第3版	佐野　新一（教育能力開発センター教授）
小泉　允雄・村上　公敏	東南アジア：ぼくらの隣人たち	三国　千秋（教育能力開発センター教授）
最高裁判所事務総局	刑事裁判例総索引　ほか387冊	西川　賢二（客員教授）
佐藤　　功	憲法　ほか9冊	萩原昌三郎（客員教授）
内田　文昭	刑法	内田　文昭（客員教授）
池田　昌昭	反映と創造	池田　昌昭（国際交流センター職員）
北　　弘志	言語と文化：英語でコミュニケーションできますか	吉田　和弘（就職指導室長）
角　　盈男	部下の心を掴む新マネジメント術：巨人原監督に学ぶ　ほか61冊	田邊　良和（ライブラリーセンター主任）

未名文庫コーナー

平成14年及び15年に寄贈していただいた「未名文庫」資料約18,000点の整理が完了し、ライブラリーセンター4階の未名文庫コーナーが整備されました。資料は自由に閲覧できますので、どうぞご利用ください。

CONTENTS

- 人間学から人間力の形成へ …… 1～2頁
- 苦し紛れにはじめた読書 …… 2～3頁
- 本と図書館 …… 4頁
- 僕とライブラリーセンター …… 5頁
- 私が見た図書館 …… 6頁
- 薬学部図書館の一利用者として …… 7頁
- 寄贈図書・未名文庫 …… 8頁

北陸大学ライブラリーセンター報
NO.18 2nd-Half 2004

平成16年11月1日発行

編集･発行：北陸大学ライブラリーセンター
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
TEL. 076-229-3021
FAX 076-229-4850
ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印　　刷：カンダ印刷株式会社